

カトリック 仙台教区報

2004年11月14日 No.160

発行
カトリック 仙台司教区

〒980-0014 仙台市青葉区本町1-2-12

Tel (022) 222-7371 Fax(022)222-7378

発行責任 広報委員会

URL ; <http://sendai.catholic.jp/>

仙台教区宣教司牧を考える会・代議員会

仙台教区管理者 平賀 徹夫

以前の「仙台教区司牧評議会」を引き継いで、仙台教区の四県からの代表（信徒と司祭）および修道者からの代表ら総数16名が集まって宣教司牧について話し合う「仙台教区宣教司牧を考える会・代議員会」の第一回の会合が、去る9月23日（秋分の日）、仙台司教区センターで開かれました。議案は「仙台教区活性化のための研修会について」で、過去の二回に続いて、司教不在となった今年度も、第二回目を開催するか、するとすればどのような形で行うかを審議するものでした。この議案のほかには、報告事項として「人権を考える委員会」から、「仙台教区・集会祭儀式次第」について、「教区広報委員会」から、青少年育成・召命育成についての各県での動き、各県・各会の現状報告交換、の発表がありました。

議案「活性化のための研修会」の中で代議員から発表された意見は、「研修会を続けるこ



とは大事だ、継続は力だ、という積極的な意見があった（青森、福島）や「研修会開催日は来年2月6日と決定した（岩手）」、また「原案通り実施したら良い（宮城）」、「（研修会では）聞くだけで終わらないように、分かち合いの場を設けること（修道者）」など、開催を希望するものが大半でした。また、

前二回の反省として、「研修の記録・まとめに工夫が必要（宮城）」、「研修で得たものを（参加者だけのものにせず）各小教区へどう還元するかも考えるべき（青森・司祭）」、「研修会の振り返りをキチンとしなければ深めることができない（福島・司祭）」等という注目の表明もありました。この代議員会では研修会の詳細

までは合意するにいたりませんでした。マは、ミサへの生き生きとした参加、形式は「話題提供（講話）」とそれに続く小グループでの分かち合い、参加対象者は「希望する人すべて」、開催日時は「各県ごとに決定する」とし、代議員会での種々の意見を踏まえて代議員代表者会で詳細を決定し、研修会の実施案内を作成こととしました。報告事項で、「人権を考える委員会」からは、取り組んでいく優先課題をまず「外国からの人々の抱えている問題」としたこと、「集会祭儀式次第」では、試案が配られてそれについて意見交換をした後、今後更に修正が加えられたものが教区顧問会に提出されて各小教区に配布されることになること、などが報告されました。

【写真】グアダルーペの聖母

塩と光

* 実りの秋を迎えましたが、わたしたちの信仰の実はいかがでしょうか。信仰は守るだけでなく、豊かな実を結ぶことができます。イエスは、最後の晩餐の席上、弟子たちに宣言なさいました。「わたしはぶどうの木、あなたがたはその枝である。人がわたしにつながっており、わたしもその人につながっていれば、その人は豊かに実を結ぶ」（ヨハネ15・5）と。*また、種まきのたとえでも、「良い土地に落ちたのは、立派な善い心でみことばを聞き、よく守り、忍耐して実を結ぶ人たちである」と言われます（ルカ8・15）。きつと、預言者エレミヤが言うように、みことばはただ読むだけ、聞くだけではなく、食べなければなりません。つまり、言われたことを実行する、実践するのです。この体験を、エレミヤは「むさぼり食べる」（エレミヤ15・16参照）と表現したと思います。*ですから、イエスは「わたしの言葉があるあなたがたの内にあるならば、望むものを何でも願いなさい。そうすればかなえられる」（ヨハネ15・7）と言われたのです。（博）

青森県カトリックの集い

『生きて、生かして、』

『化(か)わる』をテーマに

9月12日(日)、弘前教会のすぐそばにあるホテル・ニューキャッスルに於て2004年の青森県カトリックの集いが行われた。参加者は274名。

今年の運営担当は津軽地区(五所川原・黒石・弘前)。

事前の打ち合わせで、青森県カトリック連絡協議会では、この集いを通して小教区の兄弟・姉妹が交わりを通して一つになるということを目指した。

集いのテーマは『生きて、生かして、化(か)わる』。つまり、『活



大きな盛り上がりを見せた。

集いに参加した県外の方から、次のような便りが届いた。

10時から、受付。遠くから参加者を出来るだけ温かく迎えるよつ心を配った。10時30分からは、聖歌の練習。宗教音楽の専門家・熊木晟二氏のユーモアあふれる指導に参加者の気持ちも和やかなものとなった。

11時、教区管理者の平賀神父を始め7名の司祭による共同司式のミサが荘厳に行われた。

ミサの後、昼食はバイキング形式で行われたが、予想以上の参加者に食べ物がちよつと足りなかったのが残念だった。

午後1時からアトラクションが行われ、熊木先生の独唱や娘(智美)さんのデュエットで4曲を歌って楽しませて下さった。また、参加者と一緒にフランク作曲「天使のパン」を合唱した。また、抽選会や、仙台の聖パウロ書院の書籍販売もあり楽しいひとときを過ごした。

2時から、「派遣と祝福」の儀が行われ、「シャローム」の賛美歌で集いにピリオドを打った。

数多くの方々の協力で、集いは

「青森県カトリックの集いは、素晴らしいものでした。本当によく準備されていました。参加者お一人おひとり、活き活きと輝いておられました。集いの構成も素晴らしいものでした。ミサでは至るところに信者の参加による工夫がなされて、ミサの豊かさを感じる事が出来ました。『生きて、生かして、化(か)わる』のテーマのもと、充実した集いに参加させていただき、心から感謝しております。」(エノ神父)

福島県カトリックの集い

『聞こう・語ろう・交わろう』

去る9月26日(日)、郡山市のザベリオ学園にて、第34回福島県カトリックの集いが開催されました。今年のテーマは『聞こう・語ろう・交わろう』と、この集い

そのものの本質を意識し、サブテーマとして『御聖体に変えられて・・・』に致しました。このテーマを決める時には溝部司教様がいらっしやいましたので、今ま



での講話、研修会の精神を継続してお話していただくつもりでしたのに、急に高松教区に転任なされ大変ショックでした。しかし

佐々木神父様が、快くその精神に沿ってお話してくださいました。又、ミサの司式の引き受けて下さいましたので、何とか溝部司教様の穴は埋まりました。当日はあいにくの小雨模様でしたが、182名の参加者を得て落ち着いた雰囲気の中で行われました。会津若松教会はバザーの行事にぶつかりましたが、8名の参加者を送って下さいました。午

新潟県中越地震救援募金のお願い

カリタスジャパンが、窓口になっております。

義援金は下記へお願いいたします。

郵便振替 00170-5-95979

加入者名 カリタスジャパン

通信欄に「新潟中越地震被災者救援」と明記してください。

(川井田)

「絵本を通して教職の喜び(再)発見」 第42回青森県カトリック幼稚園教職員研修大会

8月17・18日、八戸ウエルサ
ンピア八戸を会場に、青森県カト
リック幼稚園教職員140名が
参加して研修会が行われた。

講師の川端英子先生は、「読み
聞かせが育てるもの」をテーマに
2回に分けて講話をしてくださ
った。

川端先生は自宅で文庫を主宰
して34年、仙台市の幼稚園・保育
所・小学校・図書館・市民センタ
ー等で、絵本・紙芝居・おはなし
などの講演や実技講習を行って
いる方。

子どもに絵本を読んであげる
こと、即ち「読みがたり・共読み・
読み合い」の読み聞かせによって
読み手と子どもの心がつながる。
その実践例として、「おやすみなさ
いのほん」「三匹のやぎのガラガ
ラドン」の絵本を表情豊かに抑揚
をつけて読んでくださり、川端先
生と参加者の心を結びつけてく
だされた。

又、「子どもの言葉と心の育ちが
読み聞かせによって育成される。
「ゆつたはともだち」「ねずみの

ともだちさがし」など5冊の絵本
を読み、言葉と心の発達の様子を
示してくださった。

第2講話では、読み聞かせによ
って、絵本を楽しみましよう」と
13冊の本を紹介し、一冊一冊を読
みながら解説し参加者を絵本の



研修会開会式

世界に引き込んでくれた。どのよ
うに絵本を扱つかによって、園児
の想像力・感受性を高めるか等、
改めて教えられた。

豊かな経験と情熱、絵本を通し
ての深い考察による講話は、参加
者に多大の感銘を与え、一言一言
が幼児教育に携わる保育者に重
要な示唆を与えてくれた。

2日目は、東北カトリック学園
理事長・佐藤守也神父が『どこに
私たちの保育の特徴があるのか』
のテーマで、カトリックをどう理
解し、どう保育にもいかせば良い
かについて講話された。

生きる姿勢を問うものとして、
新聞、書物等から資料を用意され
聖書の中からもカトリックにつ
いて分かり易く解説してくださ
った。

4年ぶりの一泊研修会、ゆつく
りと各園との交流がなされ、有意
義な研修会となった。

(イメルダ幼稚園長 藤村 重實)
6月6日、元寺小路教会2階会

カトリック新聞を読む会

＝メディアと家庭
その危うさと豊かさ＝

議室で第39回カトリック新聞を
読む会(代表 芳賀ヒロ子・北仙
台教会)が開催された。

教皇メッセージの今年のテー
マ「メディアと家庭」について分
かち合った。

折しも、佐世保の小学校で、女

子児童が刃物で同級生を刺殺す
るとい痛ましい事件が起きた
ばかりであった。

氾濫する物質や情報の中での
家庭のあり方についてさまざま
な意見が出された。

思い合わせると、マスメディア
が家庭に与える豊かさや危うさ
の背景に見え隠れするのは、戦後
日本がひたすら走り続けて来た
経済至上主義の呪縛である。高度
経済成長への道を振り返ると、所
得倍増計画が昭和35年に策定さ
れ7年で目標は達成、その後毎日
本は利益追求の姿勢をつらぬき
数字を追い求め、そして40年後の
現在、少年少女達の残酷な犯罪の
発生に驚愕している。

彼らの犯行は人の想像を超え
て衝撃的であり、いくつかの共通
点がある。一つは両親の世代(40
代前後半)で、一様に高度経済成
長と所得倍増の恩恵をたっぷり
と受けて育った世代である。子ど
も達の世代に「このような悲劇を
見なければならぬ」とは、そして
戦後の日本人の努力はいつたい
何だったのか、厳しく問われてい
る。親は、一度ゆつくりと立ち止
まり、子ども達に自分を大切にす
ることは、他人をも大切にす
ることと同じだと教え、何のために生
きるのか共に真摯に考える必要
がある。物の豊かさが精神の退廃

を生み、失ったものは大きい。
とにかく祈ろう。人間は自分一
人で生きているのではなく、他者
と共生しているのだから。共生と
は交わりであり、交わりは神であ
るから。(口野)



へえ、日本の教会は
今こうなんだ・・・
ザビエル

カトリック新聞は、日本のカトリック
教会唯一の週刊全国紙です。
全国、海外の購読者様のお手元へ毎
週直送いたします。
また、全国のサンパウロ・女子パウロ
会書店でも販売しております。

〒135-8585 東京都江東区潮見 2-10-10 日本カトリック会館 5階 カトリック新聞社
TEL 03-5632-4432 FAX 03-5632-7030 Email kodoku@cwjpn.com

週刊カトリック新聞

1部本体価格 150円(税・送料別)
購読料金(前納、税・送料込)
半年 4740円・1年 9480円

見本紙贈呈いたします

平和の道具として働きたい

「仙台・正義と平和の集い」

カトリック正義と平和仙台 協議会主催の「正義と平和の集い」が9月19日〜20日、カトリック元寺小路教会を会場に開催された。参加者は初日50名、2日目は20名。



今年のテーマは「つらぬけ！平和憲法」であつたが、今、憲法改

か「メディアは戦争をどう伝えたか」をテーマにシスター長谷川昌子（聖パウロ女子修道会）の講演が行われた。（講演内容は、5ページ参照）

入するなど、米国の意思が世界を戦争の渦に巻き込んでいくことをまざまざと思い知らされる現状である。講演の中でシスター長谷川は、このような現代社会で、地の塩・世の光として正義と平和のために働くことがカトリックの使命ではないかと問いかけられた。

さらに、2004年の日本の軍事費は世界第4位であり、今の社会情勢は昭和16年の太平洋戦争直前の状況と酷似していると指摘し、9・11同時テロ以降の米国がとったメディアの情報操作の实情を分析し、日本もイラク戦争以降報道管制に近い状況でマスメディアを

典礼の霊性を深める

神学顧問 佐々木博

ミサの中心部分である「奉献文」を司祭が唱えますが、最後の晩餐で唱えられたイエスのお言葉を述べる場面があります。ルカ福音書（22・19）と

「これをわたしの記念として行いなさい」

「記念すること」その源があります。このよ

まらない、もつと深い典礼体験なのであります。『典礼憲章』（47項）では、次のように説明されています。「わたしたちの救い主は、渡されたその夜、最後の晩餐において、ご自分の体と血による『感謝

の奉献が再び実現する（現在化）のであります。過去の出来事を典礼において記念することによって、同じ現実が再現され全く同じ恵みに与ることができのです。ですから、典礼の豊かさは、まさにこの「記念すること」その源があります。このよ



全ての人の生命は神からの賜物であるというカトリックの根本的な教えに基づき、戦争を否定し、地上の平和と市民の生命が大切にされる社会の実現に向けて、真実の報道とは何かを考えつつ平和を作り出す道具となって働けるよう祈りたいと思う。

（氏家 昭）

「メディアは戦争をどう伝えたか」

聖パウロ女子修道会 長谷川 昌子

メディア戦争

今度のイラク戦争は、メディア戦争とも呼べるものでした。

第2次世界大戦、そして朝鮮戦争までは、「ライフ」などの写真雑誌や新聞、ラジオが主要なメディアでした。次に出てきたテレビは、ベトナム戦争をお茶の間に持ち込んだと言われました。湾岸戦争は、史上初の情報戦争だと言われました。同時に、「クリンな戦争」とも言われました。それは戦場で闘う兵士の姿や、負傷した市民の姿などの生々しい映像がなかったためです。しかし、戦争にクリンな戦争ということはありません。

石油にまみれた水鳥の映像、今回のイラク戦争の際の、女性兵士救出劇は、情報操作の一つであったことが、判明しています。日本には「百聞は一見にしかず」ということわざがあり、見ることのほうを信じがちです。しかし、人間のその性質を逆手にとって、利用しようとするのです。

開戦の報道から

2003年3月19日、ブッシュ大統領が開戦を宣言し、翌20日、アメリカとイギリスはイラクへの攻撃を開始しました。最初の攻撃は、イラク時間3月20日午前5時30分(日本時間午前11時30分)でした。これは、アメリカの東部時間の19日午後9時32分に当たります。つまり、人々が一番テレビをよく見ている時間に合わせたように、攻撃が始まったということ。日本の新聞はどう報道したでしょうか。新聞によって論調が異なっています。2003年3月21日の各紙、「イラク戦争始まる」の社説を見てみましょう。「一刻も早く破壊の終わりを単独行動主義の戦争にするな」(毎日社説)、「宗教戦争にするな」(朝日社説)、「戦争はやむを得ない」(読売社説)、「米英支持」(産経社説)



2003年3月19日、ブッシュ大統領が開戦を宣言し、翌20日、アメリカとイギリスはイラクへの攻撃を開始しました。最初の攻撃は、イラク時間3月20日午前5時30分(日本時間午前11時30分)でした。これは、アメリカの東部時間の19日午後9時32分に当たります。つまり、人々が一番テレビをよく見ている時間に合わせたように、攻撃が始まったということ。日本の新聞はどう報道したでしょうか。新聞によって論調が異なっています。2003年3月21日の各紙、「イラク戦争始まる」の社説を見てみましょう。「一刻も早く破壊の終わりを単独行動主義の戦争にするな」(毎日社説)、「宗教戦争にするな」(朝日社説)、「戦争はやむを得ない」(読売社説)、「米英支持」(産経社説)

新聞はどの視点で記事を書いているでしょうか。日本の戦後のジャーナリズムは、二度と戦争はしてはならない、というところからスタートしたのですが、現在、日本の新聞は、なかなか現状を批判しない体質になってきているようです。

「埋め込み」報道

メディア業界が、「第一次デジタル戦争」と呼んでいるイラク戦争は、兵器の面でも、取材の面でも、一段と軽量化、迅速化した機器を使用した戦争でした。

メディア側と米軍との関係からいうと、「埋め込み方式」を採用した戦争でした。

これは、軍事行動に記者が参加する形で、兵士と寝食を共にし、部隊について移動しながら取材をするという形です。アメリカ人記者500人、イギリス人記者100人、外国人記者100人の取材が認められました。この100人の中に日本人のジャーナリストがいました。「ベトナム戦争」の時は、ア

アメリカの家庭にニュースが届くまでに、数日、数週間の時間差がありました。湾岸戦争の時も、映像が届けられるまでには、相当の時間差がありました。しかし、今回のイラク戦争では時間差なしの、ライブ報道を行ったのです。

「埋め込み方式」の取材は、メディア自身が戦争システムの中に組み込まれるものでした。ですから、イラク戦争従軍記者の書く記事、写真はすべて検閲を受けて、発表されたものです。つまり、私たちは、米軍の視点から見て、OKの記事や映像しか見ていないということです。

次に戦争が起こったとしても、やはり「埋め込み方式」の取材方法になり、大手メディアはアメリカの目線で記事を書いたり、映像を流すことになるでしょう。

私たちは、賢く裏を見て判断する目を養う必要があります。大手メディアだけでなく、雑誌の記事に目を通したり、インターネットで、情報を得ることも役立ちます。記事にしろ、テレビ報道にしろ、批判的な目をもつて見る、自分で判断することが必要です。

平和のために働く教皇

今年の6月20日、NHKスベ

シャル「ローマ教皇、動くイラク戦争とパチカン」が放映されました。

冒頭のシーンはとても印象的でした。アメリカのブッシュ大統領は「神のご加護があらんことを」と言いながら戦争を始めようとし、フセイン大統領は「アッラーの名のもとに徹底抗戦を」と国民に呼びかけました。2人の当事者は、「神」「アッラー」の違いはあっても、神の名を使いながら戦争をしようとしています。この両者の間にあって、「神の名において、殺すなかれ」と呼びかけ続け、平和の実現のために努力し続けるの姿は、「平和憲法」を貫こうとしている私たちに、多くのことを教えていると思います。

「人間は天地の間につきりと立って、両者をつなぐ唯一の存在です。この世と神の橋渡しをする」という意味で、人は宇宙における「祭司」であるといつてもよいでしょう」と、「カトリック教会の教え」は、私たちに告げています。新聞やテレビの報道を通して、歴史の中に働かれる神のわざを見、それを正しく評価し、価値付けて、それを周囲の人々に伝えていく務めが私たちにあるのではないのでしょうか。

= 高齢期を豊かに生きる = 仙台ロゴス研究所で講演会

平均寿命より健康寿命の延伸を！

社会福祉法人カトリック児童福祉会が運営する特別養護老人ホーム・パルシアの施設長を務める折原美子さんの講演会が「高齢期を豊かに生きる」をテーマに、9月26日（日）、仙台ロゴス研究所（北仙台教会）で開かれ、一般市民も交えて約80人が参加し、折原さんのユーモア溢れた軽妙な語り口による介護福祉論に聞き入った。

なお、同研究所ではこれからも信徒や一般市民のための公開講演会を企画している。



パルシアでの現在の介護サー
ビスは、入居者一人ひとりの希
望と意思を尊重しながら、グルー
プ単位で生活する三つのユニッ
トに分かれてのケアの提供、フ
リータイムのカフェテリア方式

の食事、仙台市宮城野区燕沢の
一員であるという自覚をもって、
地域の人々と共に生きる行事等
の設定、最後までお一人おひと
りをみんなで見守ってあげると
いう心の深み(魂)に配慮した「パ
ストラルケア」の実践、介護福
祉施設として、介護・看護・リハ
ビリ等の業務で適格であるとし
てISOに認定されていること、

「今、ここに」

仙台教区 神学生

舟山 亨

人の役に立つ仕事って？

1982年、高校卒業と同時に

に海上自衛隊へ入隊しました。

当時、東西冷戦の真っ只中で、

戦争勃発の不安が増大していっ

た時期であったように思う。ま

だ若く未熟で偏った正義感があ

ったことは事実で、不安を抱え

ながらの入隊でした。それと同

招きよこたえて

②

時期、前年度の2月、教皇が日
本を訪問した時、そのゆるぎな
い信仰に包まれた姿に感動して
いました。当時、人間は死んだ
後どうなるのかとの疑問を抱い

わり始め、日々の生活に御言葉
を味わい祈る習慣が入り込んで
きたのです。
その後10年間の短い間にいろ
いろな挫折や経験をしながら、
聖書を読むこと、祈ることだけ
は変わらず続け、洗礼の恵みを
受けたのは30歳、今も未熟さに
変わりはありませんが、神様が
望む司祭職を目指す私にこれか
らもご指導をお願いします。お
祈り下さい。

ていた私は、キリスト教という
人の考えを超えた世界があるこ
とに気づき、在隊中に一人の力
トリック信者との出会いに恵ま
れてから、私の人生が大きく変

の五つである。
ところで、今日の介護保健制度
はその普及によるサービス量の
増加、在宅サービス利用拡大と施
設利用の急増等にもなつて財
政負担増が問題になっている。さ
らには、在宅利用者施設利用者の
費用負担の不公平や軽度者の
サービス利用増加等、問題点は多
い。折原さんは、介護保険見直し
の基本的視点として、制度の
「持続可能性」を図りながら給付
の効率化・重点化を考えるべきこ
と。「明るく活力ある超高齢化
社会」の構築を図るために、予防
重視型システムに転換すること。
効率的な社会保障制度の確立
を考えていくこと、を提言する。

これまで私たちは、どれだけ長
く生きられるかを示す「平均寿
命」を健康の物差しにしてきた。
しかし、介護保険制度そのものが
種々問題になっている今、介護を
受けずに『あと何年、自立して健
康に暮らせるか』を示す「健康寿
命」を延ばして行くことを考える
べきである。

そこで、折原さんが健康寿命を
延ばすために考えている大事な
ことは、読むこと（読み）、書
話すること（人と交流する）、書
くこと（メモする）、聞くこと
（一方的に訊ねるだけではなく、
会話をする）、歩くこと、の5
点である。
さらに、寝たきりにならないた
めには脳卒中と骨折の予防を第
一に心がけながら、たとえ寝るよ
うなことが生じたとしても、過度
の安静は逆効果だから、早期から
リハビリを自力で始めるなど、い
くつかの配慮事項を示された。そ
の他としては、「手は出しすぎず
目は離さず」が介護の基本である
こと、自立の気持ちをたいせつに
したい、手すりをつけ段差をなく
し住みやすく、閉じこもりをみん
なで防ぐ、そのために進んで機能
訓練デイサービスを利用し、寝た
きりにならないように人の和、地
域の輪をひろげていくことを強
調された。
最後に、人はだれでも今のまま
年をとる。だから、今の状態をよ
りよくしていくことがよりよい
生き方につながる、と締めくくっ
た。（佐藤 英樹）

第8回全国カトリック・スカウト キャンプ泊り

大阪府立青少年野外センター

「自然を通して神を知ろう」をテーマに、8月5日から9日まで、大阪府立青少年野外センターで行われた、本大会には、アジア・ドイツ・アメリカのカトリック・スカウト仲間と全国から約1300名のスカウトと指導者が集まった。

担当の梅村司教（横浜教区長）他9名の司教が参加し、毎朝5カ所（サイト）でミサが行われた。

仙台教区からは、東仙台教会のボーイスカウト団とガールスカウト団68名が参加した。8月6日には、さわやかな高原の夕暮れに、梅村司教と9名の司教による合同野外ミサが行われた。約350名の信徒が聖体拝領をし、約950名のスカウトと指導者が一人ひとり祝福を受けた。同司教は説教の中で「主の祈りの中で『私たち』と祈ることの意味について触れ、みんなが世界の人々と兄弟姉妹となること。心を開いて対話すること、広い心で受け入れ

ることによって平和の使徒になつてほしい」と話された。

ミサの中で、ボーイスカウトの宗教章（カトリック章）の授与が行われ、我が団から3名が受章した。

また、この大会で思いがけない元気なロワゼール神父にお会いすることができた。

今回は2008年宮城県国立南蔵王青少年野営場での開催と決まった。（平岡）



ロワゼール神父から祝福を受けるスカウトたち

大阪でのキャンプの思い出

小学3年 佐藤 祐哉
ぼくは、カトリック東仙台教会にあるボーイスカウト仙台37団のカプ隊に入っています。

今年の夏、大阪で行われた第8回全国カトリック・スカウトキャンプ泊りに参加しました。

8月4日午後5時に教会に集まって貸切夜行バス2台で大阪に向かいました。5日午前8時に万博公園に到着。太陽の塔と民族博物館を見学しました。午後キャンプ場に着き、夜に開会式がありました。

6日は、大阪カテドラルと大阪城を見学しました。教会には、ステンドグラスがたくさんありました。

7日は、姫路城を見学し、夜にキャンプのお祭りがありました。お笑いの人や、大道芸の人たちが来ました。ぼくたちは七夕おどりをしました。とちゅうでいろいろの人がおどりの輪に入ってきてとても盛り上がりました。いろいろな出し物があつて楽しかったです。

8日は、グランドゴルフや川遊びをしました。さわがにをたくさん見つけました。午後、自然探求ハイキングをしました。

13カ所のポイントを回ってクイズや質問に答えるゲームです。

9日は、午前中に閉会式がありました。閉会式では、他の団の人とカードと小枝で作った十字架を交かんしました。

このキャンプで一番楽しかったのは、キャンプ祭りでした。出し物がいっぱいあつたし、自分も出ました。1000人以上の人たちの前で踊ったのははじめての体験でした。

<シリーズ>
188名日本殉教者列福の推進
広島の殉教者
フランシスコ遠山甚太郎正信
溝部 脩

1619年、浅野長晟（ながあきら）転封に従つて和歌山より広島に移った。広島は前任者福島正則がキリスト教に好意的であつたこともあり、教会は盛んであつた。しかし、1623年三代将軍家光就任とともに、その威光を内外に示すために江戸札の辻においてキリスト信者を一斉に処刑に付した。これを契機に広島にも迫害が激しくなつた。

遠山甚太郎は1600年生まれ、和歌山においてキリスト教と出会い、洗礼を受けた。和歌山にキリスト教を伝えたのはフランシスコ会の神父であり、遠山家は熱心な信者となり、甚太郎はフランシスコ会第三会会員となり、「帯の組」（コルドン）に属した。後に迫害の最中司教不在でも、信者の信仰を保たせたのはこの「帯の組」であつた。この組織なしに東北のキリシタンにつ

「宗門改め」が行われ、誓約書を書面に記して役所に届けることが義務付けられた。甚太郎不在の折に、宗門改めが行われ、彼に代わつて別の人が署名捺印して役所に書類が提出された。それを後で知った甚太郎はすぐさま「宗門返し」を行つた。更に「寺請制度」が定められ、全ての人はどこかの寺に属することが強制された。甚太郎はそれを拒み、1624年2月16日、殿の家来が彼のもとを訪れ、棄教を迫つた。それを拒んだ甚太郎は逮捕され、切腹を命じられた。信者であることを理由に切腹を拒否し、斬首された。享年24。

第48回 国際聖体大会

豊かな恵みにつつまれて

10月14日から17日まで、メキシコ・グアダラハラで第48回国際聖体大会が開かれた。日本からは、溝部脩司教（高松教区）を団長に、大塚喜直司教（京都教区）、グアダラペ宣教会の管区長イグナシオ・マルチネス神父ほか80人ほどが参加した。その内、仙台教区からの参加は16人。

一行は、豊かな恵みとメキシコの人々の温かい心につつまれ、感動の日々を体験した。



第1日（14日）午前、開会行事に参加、溝部司教の指導のもと第1カテケージズが行われ、「ミサはいけにえであり、大いなる神秘である」をテーマに、講話と分かち合いが行われた。

続いて、グアダラペ宣教会小神学校を訪問、昼食をご馳走になった。ここで、八木山教会の方々には懐かしいフェデリコ神父にお会いすることが出来た。この小神学校は、同行のイグナシオ神父様も学んだところで閑静なたたずまいの中にも歴史を感じさせられる環境であった。

午後5時から、グアダラハラ市内の野外ステージで、濱尾文郎枢機卿司式のもと開会のミサが行われた。数万人が参加したミサで、日本からの参加者は、日の丸の小旗を打ち振り濱尾枢機卿にアピールした。また、このミサの共同祈願が、参加各国のことはで唱えられたが、日本語の祈りは、岩井誠さん（一本杉教会）が担当した。

第2日（15日）テキーラ市内の教会で、濱尾枢機卿の指導で、「ミサは教会生活の中心である」をテーマに第2カテケージズが行われ、続いてミサが行われた。その後、グアダラハラに戻り、日本担当教会・受難の丘教会にて共同回心式が行われた。

ここで思いがけなく一本杉教会で長年主任司祭を勤められたフォーレ神父とお会いすることが出来た。

第3日（16日）トナラの教会巡礼。大塚司教の担当で第3カテケージズ「国際聖体大会は現代社会への挑戦をうながす」が行われた。

第4日（17日）ハリスコ競技場で、閉会式ミサに参加。世界中から集結したおよそ7万人の信徒で競技場は満員。ワールドの中央に特設されたテントの中でミサがささげられ、スタンドの大型スクリーンにそのもようが映し出された。ミサの後半では、スタンドでウエーブが起こり、大観衆が呼応した。ミサの後、ヨハネ・パウロ

世教皇様のメッセージが、バチカンからの同時中継で放映され、大歓声と大きな拍手がわきあがった。次回は、2008年カナダのケベックで開催されることが発表され感動の渦の中、大会は閉幕した。

聖体大会 アルバム



説教をする濱尾枢機卿



共同祈願をする岩井さん



濱尾枢機卿による開会ミサ

聖体大会 アルバム



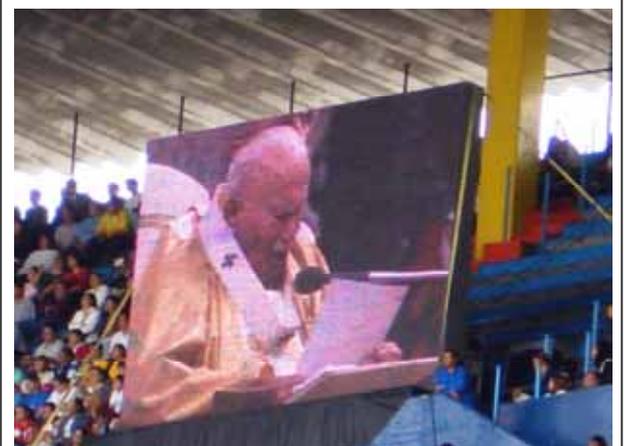
聖体行列（グアダラハラ市内）



閉会式ミサが行われたハリスコ競技場



閉会式のミサに参加した日本巡礼団



バチカンからメッセージを送る教皇様

聖体大会に参加して

一本杉 久ヶ澤 甫

は、メキシコの人たちの信仰が、生活の中に生き活きと根付いていることだ。どこの教会でも、子どもも、若者も、老人も教会前の広場でくつろぐ姿や、聖堂内で、ご聖体や、マリア像、聖人たちの像の前で祈りをささげている姿が見られた。

又、巡礼団が訪問したどこの教会でも、日本語でささげられるミサに、共に参加し、平和の挨拶では、硬い握手や抱擁で歓迎の心を表してくださった。

「同じ信仰を持つ兄弟姉妹」ということばがこれほどの現実味を帯びて胸に迫ってきたことは本当に感動的だった。

(岩井)

初めての巡礼ということ、期待と不安で一杯でした。行く時から台風の洗礼に会い、受難の幕開けではと思えました。しかし、参加者は台風の話で持ち切りで、お陰ですぐに打ち解けました。溝部司教様から「今回の巡礼は自分を見つける旅として欲しい」とのお話があり、最初の重荷を背負わされました。実滞在8日間で、瀆尾枢機卿様らによる7回のミサ、一回の共同回心式、3回のカテケーシスと内容は濃いものでした。

私にとって全てが感動でした。特に心に残ったのは閉会式ミサでした。7万人以上の全世界の人が一堂に会して一致して祈る姿は、正にキリストの共同体を味わい、意識させられ、ことばに表されないほどの荘厳さに身震いを感じるほどでした。主催国メキシコ人の明るく自由奔放な性格が、それを何倍以上に盛り上げ、これが神の国なのかと思えるほどの感動を得ました。お互いに置かれた環境立場が違ってもキリストの聖体を現代社会の嵐の中に私たちが配られるように働きたいものです。最後にこの巡礼を最高の旅としてくださった

皆様、特に溝部司教様、大塚司教様、イグナシオ神父様そして巡礼を共にした皆様に感謝致します。

一本杉 海老澤 映一

この聖体大会に、何気なく、気軽に観光気分に参加したのが私の「運のツキ」だったようです。

聖体拝領を通して恒久平和を願う何万人、いや何十何百万の人々が祈り、それらが一体となり、恐らく何百もの民族の人類が「目的は一つ、世界は一つ」の感動を共に分かち合う雰囲気は、出席した人だけがわかるものすごい神の導きを体感し

ました。そんな巡礼の中で、一匹の迷える羊（私）の心境を告白したとたん、この大会のために全国から参加したBコース40名の皆さんのパワーが、私一人に「ワーツ」と押し寄せてきたのです。特に、同行の3人の使徒（？）は、毎夜のようにテキラ片手に、アタックしてきました。それは、信仰体験の分かち合いで、難攻不落な私の城も見事陥落いたしました。気がついたら、グアダルペの聖母大聖堂で洗礼を受けている私を見ました。今思うと私は何かの「キツカケ」、理由づけを無意識の内に求めていたのかも

聖体大会 アルバム



海老澤映一さんの洗礼式



フェデリコ神父との再会



フォーレ神父との再会



日本からの公式巡礼団

知れませんが、これも神の導き、神からの「定め」なのでしょう。こうしたことを素直に受け入れる私にならなければならぬと思います。

長年聖書や教理の教育をしてくださったエメ神父様始め、それに関わった多数の皆様から感謝いたします。今の心境を象徴する聖書の一節を引用します。

求めよさらば与えられん。
叩けよさらば開かれん。
(マタイ7:7)

した溝部司教様は満面の笑みで私たちを迎えて下さり、巡礼の旅が始まりました。今大会のテーマは「聖体 千年期の光といのち」で、昨年教皇様の「教会に命を与える聖体」を基盤においての大会でした。連日のハードな日程の中で濱尾枢機卿の公式ミサを始め、巡礼地では溝部司教様のミサがあり、閉祭は現地の方々と「主は水辺に立つた」を大合唱しました。

閉会式が行われたサッカー場は、世界各国から集結した信徒で埋め尽くされ、ウエーブの連続で興奮のつぼと化し、歓声と拍手が鳴り止まない状況でした。会場内の大型スクリー

ンにバチカンから教皇様のメッセージが映し出された瞬間、私たちは涙がとめどなくほを伝い、全身の力を振り絞ってお声を出されている教皇様のお姿に感動しました。

第1カテケージスやミサの説教の中で溝部司教様が話された一言ひとことが心に染み透り、キリスト信者として私たち一人ひとりが自分を見つめ直し、信仰を深めるよい機会であり、神様からの深い愛とお恵みをたくさん頂いた巡礼の旅でした。団長として私たちをお導きくださった溝部司教様の上に神様の祝福とお恵みが豊かに注がれますように。

2005 World Youth Day を知っていますか？

若者の集い
「星の巡礼
~キリストを目指して~」



ワールドユースデイを知っている人も知らない人も、2005年のケルン大会に参加する人もしない人も、みんなで「私たちはイエスを拝みに来たのです(マタイ2:2)」と集い、司教さんと一緒に、巡礼について、教会について、キリストについて、自分たちについて、感じたり、考えたりして見ませんか？

2004/11・27(土) 13:30~17:00 元寺小路教会 松浦司教
2005/1・9(日) " 長崎大司教館 高見司教
《内容》ワールドユースデイについて司教の話と対話
ケルン大会について
ミサ

各地から

青森 十和田教会

マルセル・ポリケン神父 金祝

ポリケン神父は1954年

マリアの年に叙階され、一本杉、

鮫、浪打、三沢を経て爾来30年

間、キリストの証人として十和田の地で奉仕してこられた。

10月10日、記念ミサがラテン語の聖歌と共にささげられた。

ミサの中での信徒のトランペット演奏や、アヴェマリアの独奏は参列者の感動を呼んだ。

祝賀会はフランス料理、50本のバラの花束が贈られ、お祝いの言葉や、遠方からのメッセー

ジ、仙台、青森、八戸、三沢の各地から遠路参加した方々、歌声に包まれた暖かい雰囲気



に包まれていた。ケベック外国宣教会管区長エメ神父は「50年間キリストのことばを伝え、多くの人々に福音の喜びを伝え、いつも奉仕の精神で、前向きに行動されたことに心から感謝します」とお祝

いのことばを述べた。

参加者に配られた記念カードには「私は生けるかぎり神にほめ歌を歌おう」と銘記されていた (川村 芳子)

岩手 一関教会

近年、企業が安い労働力を求めて外国人の労働者が増えてきました。この地域では主としてブラジル人の男性とフィリ

ピン人の女性です。早朝には会社差し向けのバスを待つ人たち

ちがたむろしています。教会としても困った時にお役に立てればと思いますが、今のところ

特別の活動はしていません。そんな事情の中で、狩原光子さんの発案で「復活祭から毎

日曜日ミサ後に「日本語教室」写真が公開しました。ブラジル人が主で短期の滞在者です。会話が希望で10人前後が受

講しています。この人たちはミサにも参加します。この他、木曜日の午前中フィリピン女性

のための講座もあります。仕事の関係で午前中は起きられ

なかつたり、主婦の方は家庭の事情で休むことが多いよう

です。この人たちは文字を中心に勉強しています。その他、幼稚園の子供を抱えて

子どもを成長に不安を抱えているケース



日曜のミサにはタガログ語

で主の祈りを歌っています。福祉委員会では月々3回、

教会に来られなくなった方々にご聖体を届けに伺っています。約13名の信者の方々が市内

の施設や自宅で闘病に励んでおられます。(菅原)

宮城 元寺小路教会

インターナショナルバザー「もっと身近に！外国籍の方々と共につくる共同体」をテ

ーマにバザーを開催しました。当教会の信徒数は約1200人

ですが、このうち200人を超える方が外国籍です。しかし、

残念ながらふだんはあまり交流がありません。私たちは今年

三月二十一日に仙台中央地区で開かれたインターナショナルミサの際には、同じ共同体に

大勢の外国籍の方が所属していることにあらためて気付か

や、教会で把握しきれない人たちがもたさんいるだろ

うと思

たが、幸い時々小雨が降る程度

ことができました。お馴染みの

コーナに加えて、韓国・中南

米諸国・フィリピンなど各国の

自慢料理のコーナーが設けられ、

たくさんの珍しいお料理を提供していただきました。また

伊藤さんのウクレレ演奏と世界

各国の歌、そして広東語と北京語の「主の祈り」の披露など

もあり楽しいひと時を過ごすことが

できました。(園部)

この経験を踏まえ教会委員

福島 いわき教会

本年 4月1日、前

教区長 溝部司

教様の ご意向

により、

いわき 市内4

カ所の

旧小教区(平、湯本、小名浜、

勿来)が統合されて「いわき教

会」が発足しました。主任司祭

(チエスワフ神父)と協力司祭

(モラン神父)のご指導のもと、

旧四小教区より選出された委員により建設委員会と運営委員



韓国籍信徒の皆さんの歌



現在、いわき教会では旧平聖堂で毎日曜日午前10時30分よりミサが行われております。また、湯本、小名浜、勿来の各聖堂でも巡回ミサが行われています。クリスマスに向けて黙想会と全体ミサを行う予定です。

(西館 古田)

活動紹介

「いずみとぶどうの会」

福島市の松木町カトリック教会で、月に一度「いずみとぶどうの会」という集まりを開いています。はじめてからもう六年になり、もともとは青年会の集まりとプロテストの若い人たちの集まりが一緒になったのですが、現在は年齢や信者であるなしは関係なく、参加者が生活の中で思ったことや信仰について感じたことを分かち合う集まりになっています。忙しい日常生活を離れゆっくりした時間が流れます。



ます。

最近では聖書を一章ずつ読んで、感じたことや疑問に思ったことなどを話し合っています。しかし、とすれば話題は聖書

私の気分転換

五所川原教会

司祭 渡辺 昭一

4月1日付、北国に転勤。

就任早々庭の片隅に2坪程度の菜園を造る。ほうれん草、小松菜、春菊等の種を蒔き、トマト、ナス、ピーマンの苗を植え、朝夕水をかけては成長するのを楽しみにする。やがて芽が出たのを発見して喜び、トマトが赤く熟すのを見ては感激する。食卓には採りたての野菜を並べ、自給自足

に近い生活を夢見ている。無農薬だから虫に食われる被害があるが、共存共栄を考えてそれほど苦にはしていない。今は秋なのに、蝶や赤トンボが数えるくらいしか飛んでこないのが淋しい。町の周囲の田畑に大量の農薬を撒いているからかも知れない。かくして大地の恵み、労働の実りを感謝し、加齢にも負けない丈夫な心を持ち、強く生きたいと願っている。

古稀の秋生きて生かされ

鍬握る

修道院紹介

無原罪聖母宣教女会

郡山修道院

「創立しなさい、創立しなさい」



から離れ、最近の出来事や自分が常々感じていることが中心になります。会が終わった後は不思議に元気が湧いてきます。思いを伝え合うことで、互いの信仰を強めあっているのかもしれない。

また、年に1-2回「テゼの祈り」を行っています。機会がありましたらどちらにもぜひご参加ください。(定方)

《「テゼの祈り」について》
<http://www.taize.fr/ja/index.htm>

い、全ての天の祝福はこの新しい修道会の上にくだります。」

1902年、デリア・テトロのカナダで最初の外国宣教女の設立計画を聞かれた当時の教皇ピオ10世は、御自ら「無原罪聖母宣教女会」と名付けてくださいました。現在、国際的修道会としてカナダ、日本、フィリピン、台湾、香港、アフリカ、南アメリカその他で、「私たちは教会の中でマリアのよう」に感謝に生きる「宣教女」として日々宣教活動をいたしております。

1926年、3人の宣教女が奄美大島に來日、1930年には仙台司教の招きで郡山に移転し幼稚園を創立いたしました。

第二次世界大戦ではカナダ人のシスター達が強制送還、幼稚園も休園となりましたが、終戦の翌年再び郡山に戻り幼稚園を再開。その後、小学校、中学校を開設し、教育事業を通して宣教活動を現在に至るまで続けております。

1987年には、郡山郊外の大槻に修道院、学園共に移転いたしました。郡山の地にしっかりと

り根付いた修道会が、これからも尚一層地域の人々とのふれうちを大切に、喜びと希望のいきたいと願っております。

(藤松)

共同祈願

高松教区・中島教会の信徒の方から次のような共同祈願が届きましたので、紹介します。高松教区の全教会でこの祈りを唱えているということです。私たちも、心を合わせて共に祈りたいと思います。

愛しみ深い父よ、聖霊を豊かに注いでください。私たちは信じる民の一致を求めております。特に今溝部司教様と高松教区の人々を愛と信仰の絆で一つに結んでください。互いに愛し合いなさいと言われた主よ、私たちは、仙台教区の兄弟姉妹の犠牲を忘れず、感謝の心で祈ります。仙台教区に、善き牧者である司教様を一日も早くお与えください。

カトリック中島教会
2004年9月5日
私たちの祈りが届くまで、ミサの中で続けて参ります。

* 新米神父行状記はお休みします。